

「文運の曙光は稍々青年の頭脳に映じ」

佐藤昌介、英学を志す

北大初代総長 佐藤昌介



Sato Shosuke
佐藤昌介 東北英学其他の洋学を教

佐藤昌介は、一八五六年一月、南部藩士の長男として岩手県花巻に生まれ、少年時代は藩内の私塾で算盤、漢学等を修養した。當時を佐藤昌介は次のように述べている。

▼何故その私塾に入門したかと云ふに自分の家は代々藩主南部家の禄を食んであて勘定奉行や御納戸役を勤むることが多いからであつたのです、然しどうも武士たるものが牙籌がちゆう「そろばん」を手にして銅臭どうく「銅錢の臭い」をかぐなどは潔いものとはされない、青年時代の私に、それは余りにも気乗りのしない学問であつたのです(略)先生が二進の一進二天作の五と云つてもそれが何の意味やら、さつぱりまた子供の私には馬耳東風で、ちつとも解らず、ただ十二万三千四百五十六石七斗八升九合と

算盤の桁を動かす、たゞそれだけなのでつたのです、数理概念が立つてゐない以上、算盤珠は無意識に弾かされてゐる、勿論算盤の稽古の外に剣道、柔術、棒術と云ふ様に武芸の稽古も課せられたのであつたのであります、読書の方は例の四書五経の素読から始まり、これ亦何んの意味やらチンパンカンブンです。(漢学の復興)一九三三年四月。以下、句読点・補筆は引用者

一八七〇年盛岡の藩校作人館に入るも、漢学中心の教育は一四歳の青年の向学心を満足させるには至らなかつた。遂に翌年一月、佐藤昌介は、腰に大小二本の刀を手挟み、徒歩で約三週間を費やして東京へ向かつた。▼其頃は未だ漢学が盛んで洋学は実に微々

たるものであつた。併し知識の要求、学問の新気運は漸く其潮流を新にして、文運の曙光は稍々青年の頭脳に映じて来た

けれども、如何にして其曙光を更に大に光輝あらしむるか云ふ方法の問題に至つては実に混沌たるものであつた。(略)私は明治四年に藩の塾を退いて東京へ出ること、なつた。所謂、男児志を立て、郷関を出つて学若し成らずんば死すとも帰らずの元気を振り起して意気揚々と郷関を出たのである。(佐藤博士経歴談)一九〇九年三月

東京では、当初は儒学者吉野金陵の門に入り漢学を修養したが、「私の目的は別にあり」との決意で、深川の小笠原賢蔵塾に転じて英学修業に励むことにした。▼私等が漢学専門に頭を鍊へてゐる所へ大下への進学階梯に於て英語が必要だと云ふことになり、この外国語学の研究に手を出して見ると之も算盤を習つたときと同一の感じであつた。元来、修身齋家治国平天下の儒教主義を奉じてゐる所に英語を課せられると云ふので自分等にとつて、それ



東京英語学校時代(1876年夏) 右が佐藤昌介、中央が新渡戸稲造(附属図書館所蔵)

が苦手であつた。最初、英語の教師がスベリングを教えてくれる。ピーエー、ペー。ビーイー、ビー。ピーオー、ポー。ピーユー、ビュー。などと教へられるので口の肥えらこそばつたのである。加ふるに英文法と来て名詞、代名詞、動詞、助動詞、接続詞などを教へられ、キャットは名詞、エンドは接続詞と云つて聞かせられても之亦算盤以上だ。(前掲「漢学の復興」)

かくして、綴り字と発音、英文法の基礎を学んだ佐藤昌介は一八七一年五月、「英学其

リテラポプリ 2

「文運の曙光は少々青年の頭脳に映じ
—佐藤昌介、英学を志す—
北大初代総長 佐藤昌介—(その4)
大学文書館 山本美穂子

特集：北大は言語で世界と向き合う 4

言語こそ貴重な文化遺産
文学研究科 津曲 敏郎

君の意欲が英語を伸ばす
メディア・コミュニケーション研究院 河合 靖
河合 剛

文化と社会のなかで変容する言語
スラブ研究センター 野町 素己

「知能としての言語」に挑む
情報科学研究科 荒木 健治

佐藤 知己／望月 恒子
柳町 智治／山下 好孝

施設探訪 15

レストラン ポプラ
広報課 三分一利恵

虫と石⑦ 16

ヤマハマベエンナムシ
総合博物館 大原 昌宏

ガーネット 柘榴石
総合博物館 松枝 大治

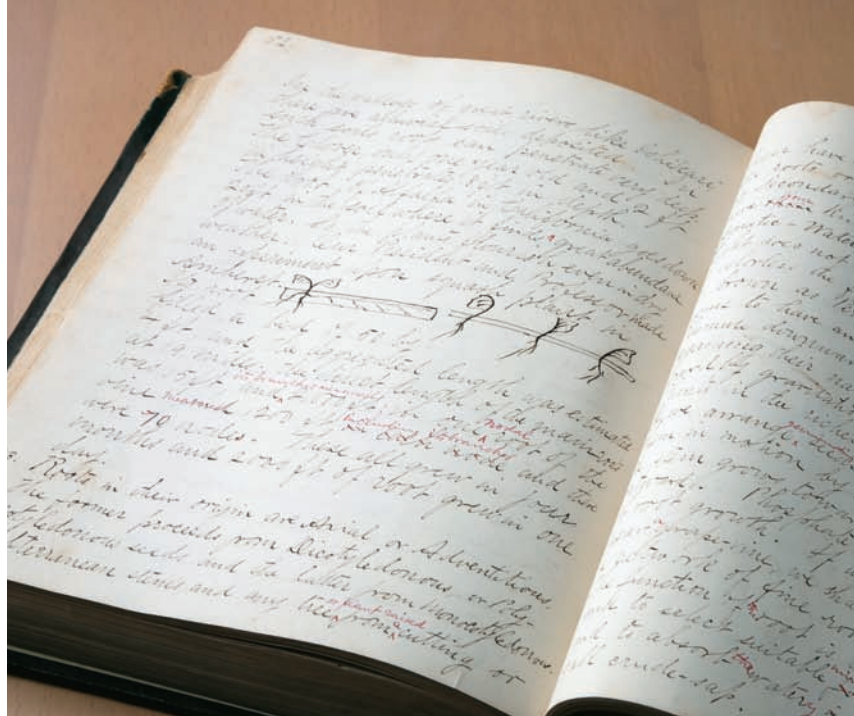
もういちど北大と出会う(その十六) 18

“四度目”の北大入学
教育学研究院 梅津 徹郎

information 19

建築設計図が語る北大の歴史(第17回) 20

古河講堂(その2)
(旧東北帝国大学農科大学林学教室)
工学研究科 池上 重康



W.S. Clark「植物生理学」を受講した佐藤昌介の清書ノート(1876年)。赤字がクラークによる添削(大学文書館所蔵)

他の洋学を教へる」大学南校に入学、「毎日往復三里の道を風が吹かうが雨が降らうが短袴たんこ弊衣ひんい破帽汚靴おおかと云ふ体でस्ताくと通ふた」という(前掲「佐藤博士経歴談」)。

▼日本の対外関係が外交及び貿易上、語学の研究を最も必要として来たと共に、蘭学より仏学、英学と云ふやうになつて来た。私は斯る時代の風潮に浴しながら大学南校に学んだのである。(前掲「漢学の復興」)

一方、この年、佐藤昌介は漢訳聖書を手する。「其は米国の一宣教師によつて著された

もので、頗る美文であつた。此が私の読んだ最初の聖書でした」(「基督者の人生観」一九三三年一月)という。翌年一月には佐藤昌介は英学修業の拠点である横浜に転じた。

▼僕は明治五年の春より横浜に於て東京一ツ橋通にある大学南校を退学後英語を勉強せるものであつたが、星亨氏の校長であつた修文館にて英語の教師たりし人はブラウン博士で同氏より英文の新旧約全書を手に入れて日曜日毎にはバラ博士の牧師たりし教会に出入して説教を聞くことに致した。(憶ひ出の記三三八頁)

修文館では朝九時から午後四時まで、綴方・文法・訳解や宣教師ブラウン著『日英会話篇』、英訳聖書を教えた。佐藤昌介は横浜公会にも通い、植村正久、本多庸一と共に宣

教師バラの祈祷に耳を傾けた。同年五月には家庭の事情で一度帰郷するも、一八七三年再び上京、翌年三月には東京外国語学校(後の東京英語学校)に入学した。

▼学課は英語に重きを置いたもので、教師は凡て英米人であつた。(略)課外授業として英国史の意訳授業もあつて、新帰朝の副校長服部二三氏は担任教官であつた。(友人の思出のまゝ、一九三二年)

一八七六年夏、開拓使が東京英語学校より北海道行の志望者を募る事を知つた佐藤昌介は、服部副校長が引き留めるのを辞して、同年九月渡道、札幌農学校に入学した。

大学文書館 山本美穂子
Yamanoto Mihoko